

特集
風土・建築

AH! OKURIKU

第26号



左上：旧師団長官舎移築復原（上越市）
右上：江戸時代からの雁木の町屋（上越市）
左下：旧新潟税関庁舎（新潟市みなとぴあ）
右下：旧第四銀行住吉支店移築復原（新潟市みなとぴあ）

支部ニュース「AH!」の第26号をお届けいたします。
今回は、「風土・建築」というテーマで新潟支所のお世話
で座談会が行われました。

風土・建築（新潟版）

2004年2月21日新潟市にて

“建てること築くこと、明日を拓く建築”を目指し、北陸支部会員各位には精根込められていることと思います。今回は新潟支所役員の方々にお集まりいただき、各々の専門的な立場から、新潟の気候・風土を踏まえた建築への取り組みと課題についてお話を伺いました。

出席いただいた方々は下記の役員で、進行役を支所長の地濃茂雄先生(新潟工科大学)にお願いしました。

出席者：梶井 照仁さん(建構造研究所)
木原 隆明さん(福田組)
黒野 弘靖さん(新潟大学)
小林 勉さん(三善建築設計事務所)
清水 恵一さん(清水組)
田淵 順さん(鹿島建設北陸支店)
西巻 道寛さん(アーキテック)
平山 育夫さん(長岡造形大学)

豊かな自然と苛酷な自然

地濃：最初に、建築の視点から新潟の気候・風土をどのように捉えているか伺います。

黒野：山に近い地方の雪処理、海に近い地方の湿田が新潟県の気候・風土を代表しているように思います。

西巻：全国第5位の面積を有する新潟県、そのうえ日本海側の特色ある気象環境の下に建築が存在しているのではないのでしょうか。

小林：水辺・海・雪=水、人情・なさけ=人、豊かな実り(米・酒)=フード、この3点に集約できると思います。

木原：気候的には3ヶ月雪の中に埋もれる。精神的には粘り強く忍耐強い。そのことが県民性。つまり、耐えるのは得意、しかしAggressiveさに欠ける嫌いがあると思っています。

田淵：まず雪国ということでしょう。それゆえに雪解けの春が楽しみです。しかしその一方で、液状化の土地柄が気になるところです。

地濃：豊かな自然と苛酷な自然が混在する新潟の気候・風土と言えそうですね。そこで、こうしたバックグラウンドを介して、皆さんご活躍中ですが、まず田淵さんにお伺いします。先ほど、液状化という話がありましたが。

巨大地震7年に1回

田淵：私は構造設計を専門としています。何より重視したいのは、建物の耐震性です。そこで、我が国で発生した地震歴から、マグニチュード7以上のものを調べてみたら、その発生間隔はおおよそ7年でした。

平山：7年に1回の頻度で、巨大地震が起こるとい



座談風景



建構造研究所

梶井 照仁さん

訳ですか。驚きですね。新潟も間もないのかな。木原：新潟地震から40年経ちますね。新潟は地震の空白地域と言えるのではないですか。私も昨今、耐震補強や免震に取り組んでいるところです。

地濃：液状化も視野に入れ、対策が急務ですね。梶井さんもこの分野で活動中ですが、業界の現状は。

梶井：新潟県設計協同組合の中に、大学教授を主としたメンバー構成で耐震判定委員会を設け、建物の耐震性向上について審査対応して

います。審査物件数は既に150件を超えています。すべてが学校関係の耐震診断と補強設計です。ピークはあと2-3年と推測しています。



地濃：耐震性への取り組みが高まりを見せていると言うことですね。田淵さんはいかがですか。

田淵：以前、村上市庁舎の免震改修工事を手掛けました。この工事の特色は、市庁舎での日常業務に支障を来さないで免震装置を取り付けて耐震性を高めようと言うもので、いわば“居ながら”とも呼ばれる工法です。これは結構うまくいきましたよ。そして今は特に、低層建物宅の制振システムの開発を課題に取り組んでいます。

地濃：特段、低層建物に注目したのはなぜですか。

田淵：地震被害では住宅火災や住宅内での死者が実に多いのです。木造などの低層建物を解決しなければとの思いからです。

地濃：確かに地震対策として、鉄筋コンクリート造や鉄骨造については、法改正もあり、指針類も多いですね。それに比べれば、木造はあまりないようですね。

梶井：田淵さん考案の低層建物を対象とした制振システムのポイントは何かですか。

田淵：摩擦とバネによる減衰装置です。つまり、共振時において応答変位の低減が可能な制振システムと言えると思います。今はまだ研究段階ですが。

地濃：田淵さんの制振システムの開発に期待したいです。ところで、清水さんは歴史的建造物の調査や修復に尽力されているようですが。



福田組
木原 隆明さん



新潟大学
黒野 弘靖さん



三善建築設計事務所
小林 勉さん



清水組
清水 恵一さん

愛着ある建築や町並み

清水：上越市内の「旧師団長官舎」や「小林古径邸」の移築復原を手掛け、建物に生きた力があつたからできたことを強く感じました。つまり、匠の技が生きているのです。匠の技を生かす、これが保存のポイントのように思います。木造古建築における耐震診断と補強も課題です。



平山：古い物は今に繋がっていると思います。豊かな自然に根差した地域の産業、それらを反映した特色ある建築が大切ですね。

小林：時代に流されない建築の探求。情報時代の本物への追求でしょうね。

黒野：愛着ある建築や町並みを残したいという市民の声も強くなって来ています。それは、専門的な知識の提供が求められていることに置き換えられると思います。

西巻：その一例になるかも知れませんが。鹿瀬町の日出谷の集落には、民家がまとまって残されています。その集落の生かし方の調査を依頼されています。

清水：上越市の400年の歴史的な雁木、このシンボルの景観が今や消失しつつあります。それは、町家から住宅団地へ住人が移動する時代になったからだとは思っています。愛着ある雁木の喪失、残念です。



地濃：良きものを残すことの啓蒙活動が大切のように思われますが。

次代を担う子供達

平山：刈羽で「子供達の古民家再生」を実施しています。築後約100年の茅の葺き替え修理をボランティアベースで行っているのです。100人もの子供達、地域外の子供達も多いですよ。こうした取り組みから、国登録文化財の量的拡大を図りたいと思っています。つまり、地方における文化財の掘り起こしです。

地濃：子供達の建築教育と言えば、木原さんも精力的に活動中ですね。木原：92年から、建築学会を通じて、子供向けの建築教育を手掛けてきました。学会での評価も高く、何より子供達が建築に興味を示してくれるのはありがたいことです。

地濃：次代を担う子供達、建築への動機づけとして成功していますね。



新潟のものさしづくり

地濃：今後のあるべき姿について、皆さんに一言づつお願いします。

西巻：何事につけても、県都新潟に集中される傾向が強いと思われます。県下の隅々まで目配りが必要でしょう。

木原：私は海外からのUターンです。ですから、日本のことや新潟のことが手に取るように見えます。一言に言って「物足りなさ」を感じます。専門家としての提案がもっともっと欲しいところです。

清水：古き良きものが簡単に失われています。住まいやまちの再生の観点から、住まい方の反省とプライバシーの考え方の構築が急務だと思います。

小林：都市の合併を背景に、小さな市町村の「文化」をどう守り、育んでいくのか、建築への取り組みを痛感します。

平山：地域や町の中にある古くから親しまれてきた建築物を活かしていく町づくりこそ、地域に根差し、特色ある町を生み出すものと考えています。この繋がりが重要だと思います。



鹿島建設北陸支店
田淵 順さん



アーキテック
西巻 道寛さん



長岡造形大学
平山 育夫さん



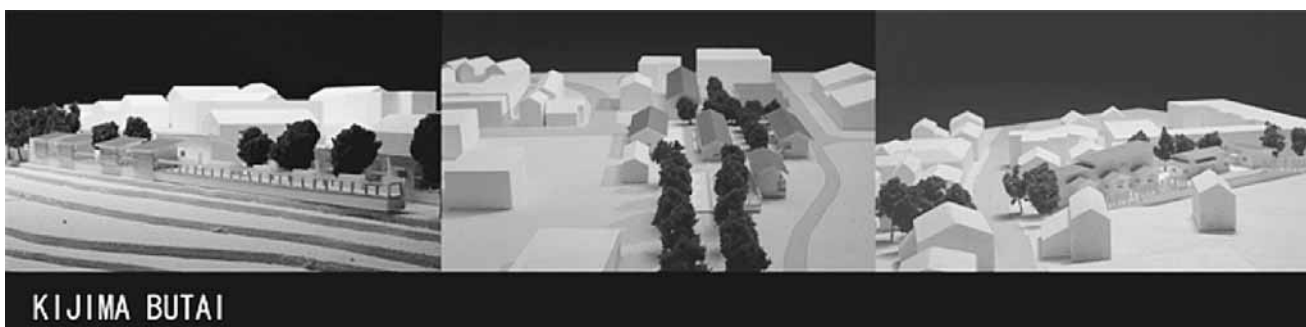
新潟工科大学
地濃 茂雄さん

梶井：トキメッセの問題で浮上した、設計責任、監理責任、施工責任、こうした責任問題の対応の明確さが強く求められるような時代になったと認識しています。したがって、ネットワークの構築や市民への建築PRがとても大事だと思います。

田淵：気候・風土を建築に活かすこと、とりわけ海との繋がりを高めることや伝統(木造)建物の保存が大切でしょう。

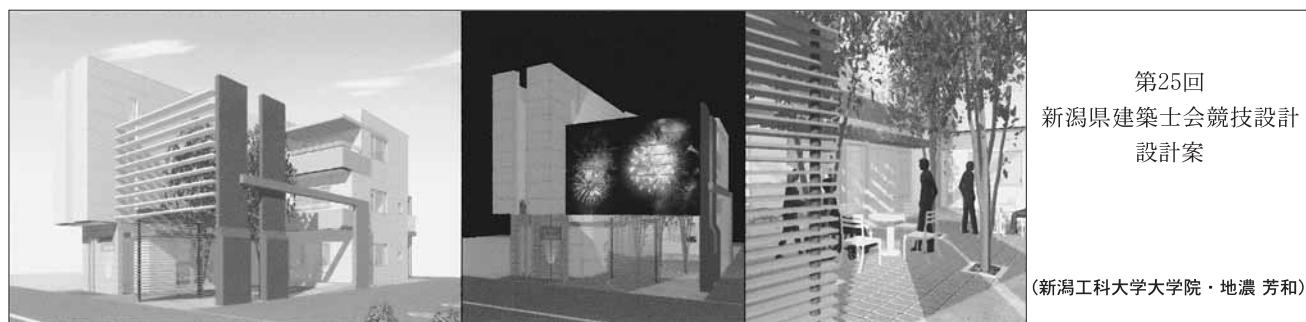
黒野：市民からの要請に専門家が適切に対応することが重要だと考えています。

地濃：専門的な立場からご提言ありがとうございました。新潟の気候・風土、それに根差した住まい・建築・まちは、新潟固有のものでなければならぬものと考えます。皆様のご意見を伺いながらそれには、新潟のものさしが必要のように思えました。ものさしづくりを意識しつつ、建築界でのご活躍を祈念して、むすびとさせていただきます。ありがとうございました。



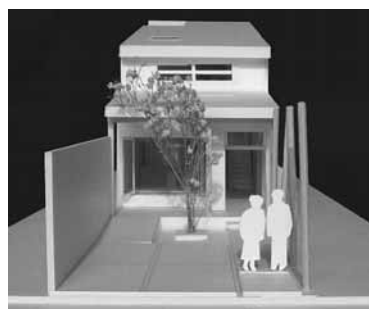
KIJIMA BUTAI

「卒業制作 KIJIMA BUTAI」 森 一広 (信州大学)



第25回
新潟県建築士会競技設計
設計案

(新潟工科大学大学院・地濃 芳和)



風通しの良い
町家



山本 優 (高岡短期大学 産業デザイン学科)

“景観”を考える

『美しい国づくり政策大綱』や景観三法の創設などにより、全国的に“美しさ”というキーワードのもとで、従来の都市整備とは大きく方向転換した都市空間の質の向上が求められています。人々の心やすらぐ空間、快適に生活できる空間を創りあげていくうえで、“景観”の果たす役割は非常に大きくなっています。

実際、1980年頃から全国的に景観基本計画や景観条例が策定され、現在では450を超える自治体が“景観”に関する条例や要綱を持つまでになっています。しかしながら、人々が広く“景観”の意味や、“美しさ”の必要性を理解し、主体的に“景観づくり”や身近な緑化活動などに取り組む環境が整っているかと言えば、決してそのような環境が整備されているとは言い難い現状です。実際に生活する住民の視点から、街区や集落レベル、地区レベルで“景観づくり”に対する共通のルールをつくり、行政がそれを支援し、育てていくような仕組みづくりが必要ではないかと思えます。

“景観づくり”といっても大げさなものではなく、普段の生活で不快に感じるもの、中でも地区住民の総意として地区にふさわしくないものをひとつずつ取り除いていくことから始めてはどうかと考えています。例えば、市街地において周囲の環境と調和しない屋外広告物、当然のごとく立ち並んでいる電柱、郊外の幹線道路沿道に無秩序に立地する郊外型商業施設など、地区住民が“美しくない”と思うものを住民と行政、NPOなどが協力し合いながら排除し、望ましい形に誘導していく仕組みを創ってはどうかと考えています。私自身も所属するまちづくり団体を通じて、『地域のことは地域で考える』という住民自治の第一歩を“景観”という視点から実践する方法を日々模索しているところです。

直接聞いたわけではありませんが、恩師がよく「景観10年、風景100年、風土1000年」という言葉をおっしゃっていたそうです。都市が成熟化に向かう今後においては、“美しい国土づくり”や、100年以上もの長い年月を掛けて風景や風土となる“景観づくり”に取り組むことが重要ではないかと思えます。人々の生活の一部として、また共通の記憶として大切にすべき風景や風土となる景観を創り、守り、育てていくことが今を生きる私たち建築・都市計画に携わる者の責務ではないかと思えます。

(株)サンワコン 計画部 藤原 英一

「あなたの考えた家、建てたい」



「あなたの考えた家、建てたい」これが昨年10月に金沢工業大学において建築系の1年生から4年生を対象に行われた住宅設計コンペの募集タイトルである。石川県住宅供給公社からの要請・協力により、学生の考える住宅のアイデアを一般の人々(実際

に住宅購入を考えている人々)に対して発表する機会を得た。そこで、その出展作品を選出するために「設計コンペを開こう」と言うことになり、学生主催によるコンペが実現した。もちろん審査員も大学院を主体とした学生達である。

通常、大学における設計教育では、「リアリティー」という難問が常に持ち上がる。あまり法規や構造、コストといった部分に捕らわれてしまうと自由な発想や新しいデザインの可能性の芽が摘まれてしまう。一方で、その辺りをいかに解き魅力的な建築を生み出すかもまた設計に求められるものである。そこで、設計の授業などでは、自然とリアリティーに対する暗黙の線引きが行われている様な印象がある。

この「リアリティー」において今回のコンペは、学生が授業で日頃取り組んでいる設計課題とは異なったものにした。その一つは設計条件である。白帆台ニュータウン内にある実際の宅地を敷地として選定し、基本的な法規や条例などにも配慮したものとした。見積書は付けないものの、周辺に建つ住宅の価格帯を意識して設計するという一文も加えた。もう一つの大きな違いは、その作品を実際に見に訪れる人々が施主の目で見るという点であった。実現は100%無い設計と違い、いい作品であれば、「この住宅を建てたい」と言う施主が現れる可能性もあるというのは、学生にとって授業では味わえない一つのリアリティーだったに違いない。

これらのことを考えて、選出された11作品の展示方法もユニークなものとした。1/50の模型と図面を実際の各敷地に方位を合わせて設置した。これにより、見る側は周囲の環境や眺め、太陽の動きと光の入り方など、実際の敷地と模型とを重ね合わせながら見る事が出来る。期間中には訪れた人々と設計者とのディスカッションを行う時間も用意した。学生達はいつもとは少し違った状況に戸惑いながらも、自分の作品を広く発信出来たことに満足そうな表情を浮かべていた。

金沢工業大学建築学科講師 宮下 智裕

批評的地域主義

建物を設計する立場の私たちが、多かれ少なかれ現在の町並みや都市、住環境に対して不満を持ったり、否定的に思っているとすれば、私たちの建物はそれに対する批評的な意味を持たねばならない。

昨年から学生たちとワークショップを行ったり、大学で授業を受け持つようになり、建築について言葉で考えなければならない機会が増えてきた。曰く「建築の果たすべき役割はなんであるのか？」何を今更というような問いではあるが、目前の実務をこなすことだけでは見過ごしてしまいがちなことを、一歩下がって考え直す良い機会となっている。

とはいえ、私が学生であった80年代以降建築の社会的、あるいは状況的意味はほとんど空洞化しているといつて良い。それは消費社会と結びついた、単純に形態の問題へと置き換えられた。バブル期のポストモダニズムからデコン建築、脱色された近代主義としてのレイトモダンとそれらはその時代性の反映ではあるけれども、それに対する積極的な意味はもち得ていない。

そういった中でとりあえず建築を考え始めるには、普遍的、抽象的な空間ではなく、より具体的に境界付けられた場所から始めるほかないと思われる。それは一種の地域主義といえるものだ。といつても地域的な特性から建築を考える方法はそれほど新しいものではなく、住宅建築の伝統工法の再生、土着主義などにも見られる。

しかしここでいう地域主義ではその地域固有の技術や形態を直接使用するのではなくむしろそれを避けるべきだと考える。無論それらの研究は重要なことであるが、それを新たな建物に直接適用することは過去の技術の優秀さを示すことにはなっても、表現における批評的実践にはなりえない。

土着の形態、技術、その地の気候、地形、歴史などを要素として一旦還元し、それと現代の手持ちの技術とを総合し、その場所の生活に適応させる。技術的には近代建築の延長にありながらその内容は境界付けられた場所由来のものとなり、結果としてその地域の自己表明となる。今、求められる建築はそういうものではないかと考えている。

こういった抽象的な意味付けがどれほどの役に立つのか、本当のところまったく疑問がないわけではない。しかし、こういった意味付けのないところでは自身の方法を無自覚に敷衍するようになり、結果的にデザイン手法の洗練のみが自作の意味となってしまう、と自分自身を振り返ってみて感じている。

わたしがここで考えたことはケネス、フランプトンの「批判的地域主義」から多くを負っているが、まちづくりや地域参加といったソフトへの参画も昨今の建築家にとっては重要な仕事のひとつとなってきたことを考えれば、これもひとつの形態主義であるかもしれない。しかし、建築を生業としている以上、やはり最終的には実際に建てられた建物が自分の批評的表現でありたいと考えている。

広瀬毅 | 建築設計室 広瀬 毅

シャンパーニュ地方のコロンバージュ

—フランスだより—



全仏の中北部に多くみられる木造建築(コロンバージュ)の中で、パリを中心としたイルド・フランスのちょうど東側の地域にあたるシャンパーニュ地方の特徴を調べてみた。かつてはシャンパー

ニュ地方の商業の中心都市であったこのTroyesという街には実は私は2度目の訪問で、素敵なコロンバージュが中心街に沢山残っていたのをすでに私は知っていた。そこで、もう何十年も前からその町のコロンバージュの修復や改築、再生に携わってこられた大工棟梁であり、建築家であり、工務店の社長であり、パリビレットの建築大学で講師もされており、色々な役職についておられるSarl VALENTINさんという方にお会いして色々聞く機会を得た。

Troyesの町の都市計画や建築計画、土木計画、国や地方の役所関係なんかをコーディネートする機関が15年ほど前からできていて、そのフィルターを必ず通してTroyesの中心部の改修が進められているらしい。いずれは、Troyes中心部をユネスコの世界遺産にということも視野に入っているとも言われた。町を歩き始め、20年ほど前から手がけられたいくつものコロンバージュを見せていただいた。第一にシャンパーニュ地方での16世紀頃からのコロンバージュの特徴としては、斜材(筋交と言っているか?)は絶対に柱にくっ付けないらしい、日本では、必ず柱と梁の交点に斜材を取り付けるのが当たり前だが、ここシャンパーニュ地方のオリジナルではではそうではないらしい、これはとても不思議な特徴だ。勿論それを良く知らない最近の改修や、又他の地方ではしばしば柱に斜材が取り付けられているのを見かける。沢山の建物がモルタル等で外壁が塗りこめられ、適当に窓がつけられたりしている建物を再生して行くに当たり、彼が言うにはまず水平材(梁)をむき出しにして、それに細工してあるくり型や、込み栓の穴等を探し出して、元あった窓の位置や間柱の位置を探し出し、そして元のファサードを復元させていくらしい。また、日本式に言うところ1階から2階以上の部分は必ずと言って良いほど30cm~45cm以上張り出している。構造的には弱くなるのは常識だが、1階部分を少しでも雨から守り腐りなどを防ぐためである。

数々の質問をしながら、私にとって特に印象深かったのは全仏中北部の各地に素敵なコロンバージュのある町があるが、たとえばストラスブールやコルマルなど、彼に言わせると他の町はごく一部しか残っていない、Troyesの町は戦災に会わなかったものもあるがほとんどが木造だと言うのである、これだけ中心街に木造の建物が残っているのは全仏でもTroyesが一番だと自信を持って答えておられた事だった。

日本では、社寺仏閣では1000年以上そのまま残っている建物も多いし、単独で400年くらい以前に建った民家もある、しかし町の中心に町屋としてまとまって400年以上も残っているのは日本では知らない、まさに驚くべきである。

参考：MASON DE L'OUTIL (道具博物館)
<http://www.maison-de-l-outil.com/>
 Sarl VALENTIN氏
<http://www.valentin-sarl.fr/index.htm>

河原一成建築計画研究所 河原 一成

快適な居場所はベクトル表示で！

私たちは、生まれてから死ぬまでの間、何時も何かを探して旅をしている生命体です。中でも『居場所さがし』は究極の命題と言っても過言ではないのです。

一昨年暮れに「『巣舞』居場所さがしの旅！」と題してエッセイ集を出版いたしました。出会ったクライアントの様々な思いが形化して行くプロセスを記載させて頂いたものです。弊社では「巣舞」を“すまい”と読み、巣は形・舞は想い！形の向こうに見えるものを大切に考えていこうとしています。

以前、新潟大学建築科の学生(50人程のクラス)に、『居場所』というテーマで設計制作してもらうチャンスがありました。学生のほとんどが「居場所」と言うと、テーマが「快適な居場所」追求になっているのは少々びっくりしました。(もともとあるもの。あると思っているもの。あってあるもの。なければ生きることが出来ないものとしての追求をして欲しかったのですが…)

その様に言いながら、いつの間にか私も、快適な居心地の良い居場所を方程式で表現されないものか？としきりに考えているから不思議です。

また“居場所”という言葉は様々な冠言葉をつけて生活の一部にもなっています。「子供の居場所」・「親父の居場所」・「主婦の居場所」・「老人の居場所」・ひとくくりに「家族の居場所」と図面に書き込むことも多々です。「私の居場所」とタイトルつければ誰の目にもとまるから居場所なる言葉は不思議な力を持っています。形容詞を加えて、快・不快な居場所。愉快・不愉快な居場所・安全・危険な居場所と…時と場所によって共感の度合いも変わります。

最近では居心地の快・不快を「ベクトル」で表せないかと仮説を立てることから始めております。ベクトルですから「力の方向と大きさ」で表現される必要があります。そこで「巣舞づくり」と「間知づくり」というファクターでベクトル化することしてみました。

「巣舞づくり」は「すまい居方」の研究から！と言われてしています。「居方」ですから方向を持っているのです。同伴する居方・対峙する居方・背中合わせの居方・ある角度を持った居方と様々です。設計作業は正にクライアントの「すまい居方」の研究から出発です。

次に、私は街づくりを『間知づくり』と呼んでいます。個々の家々が持つ間合いは街としての顔を作りま

す。距離感を大切にしなければならないのは人と人の関係だけではありません。家と家の間隔もとても重大です。高度成長時代、デベロッパーはミニ開発にエネルギーを注ぎこみ20坪～30坪の開発も乱立しました。結果ピアノ殺人事件という悲しい事件が起きたのです。隣家で練習するピアノ音がうるさいと言うのです。ミニ開発における距離は大きなテーマになりました。当然制限が掛けられることになり、100平方メートル以下の敷地には公庫の融資条件が制限されました。

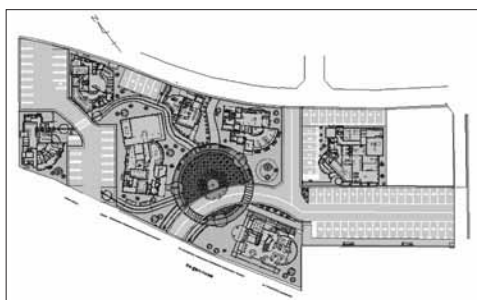
大事件にならなくとも適度な距離がとても快・不快に影響することには変わりはありません。その一つは視覚距離であり、聴覚距離でもありません。近年、医療福祉施設関係の整備基準が毎年のように変わっています。その大テーマが複数人床室から個室・一人床室への移行です。正にプライバシー確保と言う距離確保なのです。

「すまい居方」と「間知」は「方向」と「距離」の関係を示してくれます。正にベクトルです。卑近距離でも方位をちょっと振ってやるだけで居心地のよさを確保できたり、反対にどんなに遠くても双眼鏡で覗き込まれているようでは気分はよくないものです。隣に高いマンションが建ったことでかなりの不快感を覚えることも報告されています。それは威圧感だけではなく、覗かれているという視覚上の距離間欠けによるからです。

今そんなベクトルを駆使して快適な巣舞づくりから間知づくりを研究課題にしています。間知づくり三題のご紹介をします。

- ①5診療所を持つメディカルパークはビッグバンのような渦巻きを持ったプラン配置。各戸のアプローチ方位も渦巻き接線方向で自由です。
- ②19区画の住宅分譲地計画はクランク型道路で計画されています。加えて、今までの植栽を残しておく記憶の距離感を保存したものです。
- ③12区画の長岡ニュータウンの間知づくりは周囲に各戸が歩道を1.5メートル供出し共有させるものです。統一・連帯距離感も大切なファクターです。

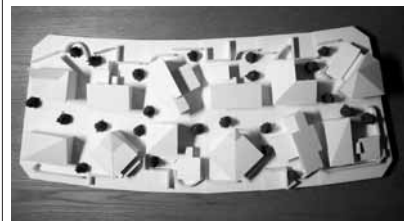
(株) 高田建築設計事務所 高田清太郎



図①(日) メディカルパーク



図②クランク型道路



図③長岡ニュータウン

シリーズ隠れた建築紹介 **残されて解った大正期の技術**
「長野県旧知事公舎洋館」

長野県旧知事公舎は大正9年の創建と言われ、洋館と和館が繋がって一体となり大正ロマンを秘めた建物であった。長野県では諸般の事情により建物を取壊す事になった。しかし、NPO法人信州伝統的建造物保存技術研究会の陳情が県にも理解されるにいたり、記録保存を行うことが決まった。

調査終了を待って一般公開を行い、多くの希望者の中から元県知事の出身地長野県上水内郡小川村に無償譲渡する事になった。

解体移築と言う事から、現状調査に伴い創建当初の姿はどうであったか、復元調査も同時に行われた。現状の洋館外部の窓はアルミサッシに変られ、外壁はモルタル塗で弾性吹付タイル仕上となり、内部の一階は何回かの改変により仕上は新材材に変られていた。二階の一部も同様であった。解体工事は、洋館の外部モルタルの一部撤去、内部の壁の撤去と進み、内部から外を見ると外壁全面に平瓦が見えた。これは土蔵の腰壁と同じ工法でナマコ壁だと思った。外のモルタルを丁寧に撤去して見ると、これは予想とはまったく異なり、平瓦が下地の木摺にそって上下とも2ヶ所釘止めされていた。その釘頭に麻(下(さ)げ芋(お))を結び、千鳥に伏せて塗り込まれていた。中塗も南蛮漆喰塗で、仕上は薄モルタル塗(横目地入)の上に着色がされていた。その上に、昭和になってさらにモルタルが塗られていた。県内では類例もなく長崎県にいる友人にたずねた処、重要文化財でも二例しかなく旧福岡県公会堂貴賓館(明42年)と旧山形師範学校(明43年)を紹介してくれた。さらに『明治初期の擬洋風建築の研究』工学博士近藤豊著によると、名古屋大学文学部校舎(明6年)、三重県庁舎(明12年)の二例が紹介されている。この文献においても、洋風大壁構造がまだ理解されなかったこの時期だから、土蔵等に使用されてきたナマコ壁の工法と中間的な壁手法が取り入れられたのではないかと述べられている。

解体中のこの現場から、明治期の擬洋風建築の手法が発見された意義は大きく、大正9年以降どこまでこの工法が使われてきたのか、今後の調査も楽しみである。

信濃伝統建築研究所 和田 勝



知事公舎

いきいき街づくり
心が起きるまちづくり
～福井市春山地区
花と緑のモデルスタディから～

「希薄になった世の中で、子どもからお年寄りまで一緒に花や緑を育てて、地域を元気にしましょう！」
住民主体で花や緑を植えるモデルスタディを始めて

2年になります。冒頭の台詞は、松本通り沿線の植樹樹に住民の手で花を植える話を持ちかけたとき、住民の方々の難色気味の空気を一転させた言葉でした。

それでも「この辺り中心部は年寄りばかりで、子どもの姿もない。地域のために老若男女が集まる風景は、とうの昔になくなってしまった。もう無理や。」という老人の諦めの声がいつまでも私の心に残りました。

まず、3月の終わりに500mにわたる沿道の植樹樹に、住民約80名で約5,000株のパンジー等を植えました。5月には、まな板くらいの大きさのトレーにマリーゴールドの種を一粒一粒蒔き、各家庭で200粒づつ育て、その苗を植樹樹へ移植しました。

種から育てるプレッシャー、しおれてしまった時の落胆、1時間にも及ぶ水やり、害虫の発生、特定の人に偏る水やりの負担…次から次へと押し寄せる困難に、うんざりし、ぎくしゃくした雰囲気。スタッフ側にも「やっぱり無理か」という沈痛した思いを感じはじめた初夏、みんなで育てた赤や黄色やオレンジのマリーゴールドが溢れんばかりに、咲きはじめてのです。

そして、風景が一変したその時、心の変化が起きました。「この通りは日本一や」「これからもずーっと四季折々の花を咲かせたい」「行政がやるべき？いやいや、これからは住民参加の時代」と住民が住民を論し、お互いの労をねぎらうようになったのです。

水やりなど一定の人に偏った負担の軽減策、自治会を超えた連携等を話し合い、春のパンジーの種まきの有志は募集枠の30人を超える50人が参加しました。

植樹樹への移植には、住民自ら段取りを組んで汗をかき、土づくり、肥料づくりからチャレンジ。これまでの高齢者や女性に加え、子ども、男性、一家総出という新顔が登場しました。そして、今、雪の下で育まれたパンジーの開花の時を静かに待っています。

住民参加のまちづくりの現場に入って10数年になります。住民が主体となったまちづくりをめざす中で、いつも越えられない壁があります。無関心な市民の心を起こし、地域に愛着を抱き、永続的に住民が自治していくまちづくりです。そんな壁に、少し風穴が通り、そよそよと春風が吹き込むような気配を感じ始めています。その成果の要因は、①一過性の参加ではなく、植物の種からの育みを通じて人間の本能から地域を育む感性を呼び覚ますこと、②症状(=問題)が出てから対処すること、③専門家や行政主導ではなく、住民に問題を委ね、話し合いで解決していくことです。

第11回福井市都市景観賞の活動部門を受賞した時、住民代表の方の「もう大丈夫。自分達でやっていきます。続けないと意味がないからね。」という言葉に感謝しつつ、これからの地域づくりの手綱を彼らに託し、見守っていききたいと思っています。

株サンワコン 鈴木奈緒子

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第26号

発行日 2004年5月22日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

清水 恵一(新潟) 玉井 泰子(富山)

早見 洋平(長野) 山崎 幹泰(石川)

野嶋 慎二(福井) 菊地 吉信(福井)

事務局 穴井 伸二・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F

TEL&FAX 076-220-5566